

塵 劫

堀江茂雄

関西大学レスリング部の30周年にあたり、前監督といたしまして僭越ではありますが一筆とらせていただきます。

一言に30年と申しますが十年一昔と申しますから、ことに外来スポーツということを考えあわせまして、三昔というのは貴重な年月であります。それは日本のアマチュアレスリングの歴史と云っても過言ではありません。いわんや関西レスリング界に、果たした役割は誠に大なりと信じます。

それを創出したのが団結協調の伝統です。学歌に「自然の秀麗、人の親和」と謳われますが、就中「人の親和」の精神を具現したこの伝統は長い部史を貫きました。

これは栄枯盛衰の変遷の中で栄をたかめ衰を支えた大木の幹にたとえられます。

この幹からは種々の技がのびました。指導者としては、松井清（日本アマチュアレスリング協会副会長・全日本学生レスリング連盟会長）、押立吉男（西日本学生レスリング連盟理事長）、佐々木敏（大阪府アマチュアレスリング協会理事長）、市口政光（日本アマチュアレスリング協会強化コーチ）、伴義孝（国際特級審判員）を、そして国際的選手としては横山勝利（国際青年スポーツ大会2位）、西脇義隆（全米チャンピオン）、市口政光（東京五輪、世界選手権大会ゴールドメダリスト）、山本定夫（世界選手権大会5位）を生み出しました。その他多くの指導者、名選手を内外に輩出しております。

かかる栄誉ある部の監督を、その重責をも省りみず、引受けましたことは一生の光栄でした。

何故ならその使命を通じて人間の素晴らしさを知り、人生の崇高さを教えられたからです。

社会と特に政治とスポーツが表裏一体をなしていることは自明の理です。私が就任しました昭和43年頃は池田首相時代の神武景気による高度成長期から安定期に入り、国民もようやく戦争の惨禍を忘却し、世の中に新しい秩序が生まれ、生活にある程度の余裕ができた時期でした。

このよきな社会の趨勢の下にスポーツマンシップにも微妙な変化が生じました。この時代以前の運動選手は社会の軋轢に抗して、全人格を投入して、何事にも馬鹿になって打込む人が多勢をしめました。それに対して彼等は人生をより有意義にしようとスポーツをする気風になってきたようです。

戦後に生れ窮乏を知らない選手の人生観、価値観は、そこから何かを掴みとろうとするより、体力面における健康増進という面を重視する傾向に変わりつつありました。

このような過渡期にあっても、関大レスリング部には敢闘精神が残存し、連覇記録をのばしました。

昭和43年

この年は、有力選手を前年にひきつづき卒業で送り出したのに対して、近大、関学、同大の充実振りは著るしく関大危うしの前評判でした。

春のリーグ戦の抱負は「優勝、関西学生のレベルアップがモットーである。倉橋主将、阿部を全米選手権に送り、長井副将のハードトレーニングの下に、その目的達成に余念がない」であり、これを意気込みとして、主将倉橋、副将長井・笹井、主務村上を核に全員が劣勢をはねのけるべく必勝の信念に燃え励みました。幸い全クラスに平均したメンバーを持つ有利性を発揮しかつ合宿の猛練習が実

を結びこの難局を切り抜けました。

秋季リーグ戦は、春の9連勝を更に自覚して、その抱負も「我部は10シーズン連続優勝の為に練習している。そして必ず実現する」ことにおき、春同様精進の結果連覇しました。

この年、市口政光OBがメキシコ五輪のグレコローマンのコーチとして活躍し、グレコで金メダル1、銀メダル1の計2名のメダリスト（フリーは金メダル3）をだした指導力は讃えられるものです。

昭和44年

この年は更に絶対絶命のピンチでした。近大は卒業生を一人も出さず、木野、大治のポイントゲッターに藤本、木内、橋本、辻の好選手を擁し、関学も笹尾を中心に菅沼、高崎、中島とならび、この両校は黄金の陣容を誇りました。

我校は、前年度同様ポイントゲッターを多く卒業させました。しかし、当時の2回生、森本和博が綴る「わがレスリング部について」の一文の通り、その精神で全員連覇を胸に秘めて練習に励んだのでした。

まず最初に、わが部の全容を紹介したいと思います。年に10日間の強化合宿が春と夏にあり、西日本リーグ戦の前には1週間ほどの合宿があります。昨年入部して、驚ろいたことに、何と規律正しいことか。高校時代に、大学生の概念というものが見てたるんでいるという感があった。それゆえ一層その規律さというものが私の心に映ったのです。

練習における諸先輩方の、われわれを思いやるあまりのシッタバトゥ！ 何度逃げ出そうと思ったかしれません。しかし、練習後の解放感、精神的充実とは他の一般学生には味わえない、われわれ唯一のものだと思います。先輩方も、練習の時には鬼のようにきびしくなりますが、練習を終えると、くだらない冗談などをとばせて、われわれ下級生を喜ばせてくれます。

われわれが最も力を入れる試合は、やはりリーグ戦です。昨年の秋季リーグ戦で、みごと10連勝をなしとげました。実力は他の大学と互角だと言われていましたが、優勝したのは、やはり、わがレスリング部の伝統と良き先輩方の指導のたまもののだと思われまふ。リーグ戦真近になると、道場では異様なほどに熱気立ち、いかに選手各人が真剣になって練習しているかがよくわかります。わが部は特にグレコに優秀な選手が多く、この間の全日本レスリング選手権大会においても、今春卒業した倉橋主将・長井副将、そして現・平池副将は、3位・2位・2位とりっぱな成績を残されました。

こういう先輩方を見て、私も早く強くなって先輩方のようになりたいと思い、奮起して練習している昨今です。

練習内容は、日によって多少ちがいますが、だいたい1日3時間ほどで、多い時には4時間にもわたる時があります。その間、スパーリングとトレーニングをやりますが、トレーニングでは足を使う補強が多く、足腰が弱い私にとっては苦しいことばかりの連続です。腕力をつけるトレーニングでは、綱登りとかバーベル、鉄棒を使ってのけんすい等々です。しかし、減量の苦しさ、練習の苦しさ、勝利の喜び、敗北の悲しみ、これこそ、われら若者独特の特権だと思います。これからも、わが関大レスリング部は、日本に、いや全世界に羽ばたく荒ワシのごとく、飛び回る存在になることを希望して一生懸命練習にはげみたいと思います。（J.A.W.F.機関誌）

北川主将、平池副将に服部、阿部、西岡の4回生に富田、山田をそろえ春季リーグ戦は、同率優勝でしたが連覇を成しました。その年の我部を「練習熱心、OBの力が大きい。やはり王者のチームだ。」と関係者からみられたものです。

秋季には、3回生以下が着実に台頭して、また4回生の確実性が一段と増して、堂々5戦全勝で優勝を飾りました。

前年に引き続いてのこの4シーズンほど伝統の力と選手の執念に感動し、「精神一統何事かならざらん」ということが肝にこたえたことはありません。

好事魔多し

だが、好事魔多しの諺の通り、この頃から大きな社会問題であった大学の改革運動が一層激化してきました。そこに日米安全保障条約の自動延長の問題がからみ、日本中を嵐が吹き荒れました。比較的影響の少なかった我校も昭和44年にはその煽りを避け得ず、過激派学生は学舎を占拠し、器物を破損し、体育会は彼等と対決するという状態になりました。

この為に一般学生は勉学を妨げられ、クラブ活動も鈍りがちになりました。ゲバ学生は攻撃目標の少ない関大に対して「体育推薦制度」をやり玉にあげ、ついに45年度より廃止のやむなきにいたりました。学内の不穏な空気で入部者が激減したのに加えて、この打撃は致命的でした。また財源の面でも凍結で従前の体育会予算はなくなりました。

昭和45年

しかしながら、45年度は「主将の重責を自覚し卒先して、部をリードしている富田、副将の尾上が優勝への大きなポイントになろう。重量級の山田、森本、和田も一段と安定性を増したのは心強い。しかし軽量級の稲本の出場イカンが13連勝の鍵になろう」と評価されていた我部も、主将富田、副将尾上、主務松田、川那辺、佐藤の4回生のもとに、戦力低下は隠しきれず春リーグ戦は5位と、惨敗しました。

これに奮起して、秋にカムバックすべく練習に励み、「春と同じように軽量級の実力いかんで上位進出がなるであろう。重量級の山田、和田、太田、佐藤の実力は安定している。春同様稲本の出場いかんで上位進出もなるであろう」と期待されて秋季リーグ戦に臨みましたが、選手の努力が実って3位に上昇しました。

この頃、大学紛争の悪影響が主力選手にさえも、「なぜ！レスリングをしているのか？」との疑問を抱かせ部から離れるものでできたことは、頭痛の種でした。そうした時、主将富田が、その精進を認められて、秋のリーグ戦において学連規定の努力敢闘賞をおくられたことは我部の誇りでありました。

この年には、伴コーチが4月にソ連の国際グレコローマン大会に監督として日本代表の3名のミュンヘン候補選手をつれて参加しました。その「ソ連遠征報告書」は大変に綿密で「日本選手の今後の課題の指針」が後に表われて、その内1名は翌年の世界選手権で第2位、また他の2名はミュンヘンオリンピックで活躍しました。

昭和46年

46年度は、山田主将の他わずか森本副将、米北、稲本を含めて10名足らずの人員で奮戦しました。

春のリーグ戦での主将の声は、「昨年、春季5位、秋季3位と上昇ムード、今季リーグは母校の名誉にかけて頑張りたい。」で、関係者は「部員減少で苦しいが、重量級が山田主将をはじめとし、和田、太田と全く安定しているので、軽量級次第の、試合展開となるであろう。復調した稲本、米北の実力は問われるが、森本、阿部等は、試合経験豊富であるので彼等次第で優勝も望める。」と、関大の奮起を期待していました。が、春5位に終り、「心機一転、今季リーグは母校の名誉にかけて頑張

りたい。」と、秋に成果を問うことになりました。この関大チームを、「西日本レスリングの歴史を支えてきた関大だが、2、3年生の間に大きな断層がある。部員減少で全く苦しいが、森本、主将山田、和田、太田という4人のポイントゲッターがいるだけにあと一つ勝ちたいところ。2年に期待できないので阿部、平野にウエイトがかからざるを得ない。最も、今季リーグ、伝統と意地を発揮して欲しいチームである。」と周囲は冷静にみていました。これにこたえて、秋季リーグ戦4位と意地をみせたのでした。

昭和47年

ついに47年度にいたり、和田主将、太田・阿部副将、平野主務他数名の部員となり部の存続は風前の灯となりました。「部員減少に悩んでいるが、全員一団となって頑張りたい。」「部員減少の中で昨季は4位と伝統と意地を発揮したが4回生のぬけた穴は大きい。主将和田を中心に阿部、平野、太田らが一団となってねばりある試合展開をしてほしい。」こうした状況下であって選手一同頑張ったが、長びく紛争の影響もあって頼みの4回生に故障者がでて、その結果リーグ戦全敗となり、1・2部入替戦も関大2一⑤名城大(1分1両失)と負けて史上初の2部リーグに転落しました。

「過去輝かしい伝統を持つ関大がこのままで終るとは考えられない。西尾、阿部、平野、和田、太田と言った4回生中心に頑張れば、2部優勝1部復帰も可能なチームである。1、2回生の活躍に期待しよう。」この秋のリーグ戦は新鋭大体大の活躍に阻まれて2部リーグの2位に甘んじました。この年を一言で表わせば、部員激減につきます。ちなみに、9名のメンバーは、柔道部や休学中の学生の再手続者等を借りて構成したのでありました。

されども野火の如く拡がる学生運動は弱まる気配はありませんでした。この社会の歪みは我々を本当に困らせました。しかし創生期の諸先輩の辛苦を思い、可能な限りの対抗手段を構えました。大学に在職する伴コーチのお世話で新入生の高校時代のクラブ活動歴を調べ、該当者に往復ハガキを発送し、返答がある場合に勧誘したり、関大一高の再建を試みたりしました。勿論学生達も一生懸命に勧誘運動をしました。しかし所詮は対症療法でしかなく、効果は薄く抜本的対策にはなりえませんでした。なにしろ大学の本質である学問さえ正常に行なえませんでした。我部に限らず他の部も壊滅的打撃を蒙り活動は氣息奄奄でありました。

かく申せども当事者であった我々指導陣の力不足は否定できません。真に45、46、47年度の部員には条件の悪いめぐりあわせでありましたが、その経験を生かしてご精進されんことをお願いします。また、最悪の条件下の奮闘に誇りをお持ち下さい。我々指導陣もことある毎に当時を語って貴重な経験に感謝しております。

個人戦展望

昭和43年春に倉橋、阿部の両選手を全米選手権大会に送りました。阿部はグレコの57kg級で2位に入賞しました。また、同じ頃国内では、メキシコ五輪の第一次予選会が開かれ、藤田がグレコのライトヘビー級の2位となり気をはきました。これらの3選手に期待して関大では盛大に壮行会が開催されました。

4月5日、本学第一グラウンドにおいてレスリング部の倉橋裕(経4)、阿部進(文3)＝全米選手権出場のため

めの渡米、そして藤田裕充（経2）＝メキシコオリンピック候補、の3名の壮行会が行なわれた。中谷学長、久井理事長なども出席され、また本学レスリング部OBのOB会副会長の松井氏は、応援団を先頭にグラウンドを入場行進するレスリング部員を見て感激もひとしおの様子であった。吹奏楽部の演奏する学歌、応援歌の後、倉橋主将より力強い謝辞が述べられ、盛大の内に壮行会を終った。倉橋、阿部の両選手は壮行会が終るとすぐアメリカ遠征の途についた。……中略……これら3選手に対して、特に壮行会が開かれたのは、3人に対するメキシコオリンピックへの期待、海外遠征における好成績がその因である。今後とも、彼らに激励を送り、大いに期待しよう。（関大スポーツ）

この年は、西日本学生レスリング選手権大会に次の入賞者を出しました。フリーでは、57kg級平池（3位）、68kg級長井（1位）、同北川（3位）、74kg級倉橋（1位）。グレコでは、52kg級稲本（2位）、同西尾（3位）、57kg級平池（1位）、62kg級西岡（2位）、68kg級笹井（2位）、74kg級長井（1位）、82kg級倉橋（2位）。

また全日本学生選手権大会では倉橋がグレコの74kg級で第3位に入りました。

昭和44年2月、前年のメキシコ五輪の関係で43年度の全日本選手権大会が大阪で開催されました。特筆すべきは、当大会でのグレコローマン・スタイルに出場の3選手の活躍でした。フライ級で平地雄三が平山選手（社会人ナンバーワン、後のミュンヘン五輪2位）、等を向こうにまわして第2位、ライト級では長井暁が優勝者の荒木選手（日体大）と大接戦を演じ惜しくも第2位、ウェルター級で倉橋裕が岡選手（国士舘出）等強豪を相手に善戦し第3位になりました。優勝者こそ出ませんでした。全員メダル獲得は関西勢に刺激を与え関東一辺倒に一矢を報いました。

この年、発奮した部員は、全日本学生選手権大会で阿部が3位になりました。また、西日本学生選手権大会では、フリーで、57kg級阿部（2位）、同稲本（3位）、68kg級北川（2位）、74kg級山田（2位）、グレコで、57kg級阿部（1位）、同平池（2位）、62kg級西岡（2位）、68kg級服部（2位）、74kg級山田（3位）、82kg級太田（3位）でした。

昭和45年は、西日本学生選手権大会で、フリー62kg級に富田が3位、グレコ57kg級に森本が3位、同74kg級に太田が3位に入賞しましたが、この頃より部員減少に伴い個人戦においても低調が続きます。

昭和46年は西日本学生界随一68kg級の山田が、西日本学生選手権大会で2階級優勝（フリー68kg級、とグレコ74kg級）をかざり、不振下の関大に鋭気をもたらしました。また同大会のグレコでは、他に57kg級森本（3位）、和田68kg級（2位）などが活躍しました。

昭和47年度は、主力の4回生4名の少数精鋭で臨まなければなりません。そうした中で太田が全日本学生選手権大会のグレコ82kg級で第3位に入りました。当時実力では西日本学生No.1の和田は、故障の不運にみまわれ、おして出場した西日本学生選手権大会の68kg級フリーで3位に入賞しました。その他同大会でフリー・グレコ共82kg up級で太田が2位でありました。またOB関係では、市口政光、伴義孝両OBが、ミュンヘン・オリンピックの強化コーチとして活躍しました。

選手のプロフィール

かく混乱期でありましたが、各年度は伝統のまとまりで各々味のある雰囲気を出していました。又昔日のようなサムライは少なかったが、格闘競技者らしく独特の個性の強い選手がいました。

倉橋時代は、彼と強烈長井がコンビの妙を得、そこに一風変わった笹井、村上がおり人間集団の面白

味がありました。

北川時代は、この俊治が実に良い男で一筋縄ではいかない平池、阿部、服部等の同輩を卒い、富田、山田というムツカシイ後輩を統卒していました。ここに一筆加えると西岡禧伯がいます。労働、勉学、それにレスリングとどれも怠ることなく4年間頑張り通し、境遇に敗けない意志力を感じさせました。

富田時代は、彼自身細い体に鞭打って独特の片足タックルを完成し、尾上、増田、川那辺等と周囲の悪条件とたたかいました。

山田時代は、彼のあの人を食ったような風貌から想像もできない神経のゆきとどいたリードが同輩米北、稲本、また後輩にそそがれました。彼を助けた森本は地味ながら好青年でした。

和田時代は、彼が実に豪快な男で今も変わってないのはうれしいことです。太田、阿部、平野もバランスのとれた人物でした。

期 待

最近キャンパスにも平和が訪れ、部員数も以前に劣らぬぐらいになり、新時代を迎えようとしております。戦力はまだ往時に遠く及びませんが、徐々に実力が向上しているのは誠にもってうれしいことです。51年度の秋季リーグ戦での大西司人の執拗な攻撃は関大魂の復活に他ありません。

私の申しあげる科白ではありませんが、先輩諸氏におかれましては、OB会の再編成もあり、これを機になお一層のご支援の程を賜りたく存じます。又現役及び今後入部する諸君はこの30周年を出発点として、伴監督のもとに、レスリングを通じて人格の陶冶に励み、それを超越して一個の人間道を完成し、更に関西大学レスリング部を関東の大学に伍するチームに飛躍させることを懇願します。

未筆ながら、陰に陽にコーチ陣と選手を叱咤激励して下さった高堂俊弥部長に心から感謝いたします。又良きコーチであった故村山栄治君の霊安らかならんことを祈ります。

関西大学レスリング部前監督

寝屋川市アマチュアレスリング協会副会長